The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	享保三年京の一夜 ： 都賀庭鐘の周辺
Author(s)	福田, 安典
Citation	語文. 1995, 62-63, p. 45-53
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68870
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

享保三年京の一夜

――都賀庭鐘の周辺――

福田安典

読本作者の祖として名高い都賀庭鐘が京都に遊学したのは、享保末ごろと推測されている。二十歳に及ぶか及ばないかの若き庭鐘が住み馴れし大阪を離れ、京に遊学せんと志したその心中に期するものが何であったかは今となっては知るよしもないが、その大きな要因のひとつが当時京摂で評判の医師、香川修庵に師事するためであったこと、いまさら述べるまでもないことである。

では、庭鐘がなぜこの修庵なる人物を師として選んだのであろうか。修庵は医を後藤艮山、儒を伊藤仁斎に学び「儒医一本論」を提唱、斯界を席捲した人物であった。古義堂当主伊藤東涯とも親しく、また多くの門人を抱えた新進気鋭の医師であった。ゆえに彼邦に憧れを抱いていた庭鐘が、医のみならず儒にも通じ、古義堂とも交流のある修庵に師事したのだと単純に考えることはたやすい。しかしながら、庭鐘の学問を見るに、庭鐘が古義堂の系統とは違うことは早くから指摘されているし、実際に東涯の門人録を繙いてみれば、修庵の仲介によって多くの門人が古義堂の門を叩いているが、そこには庭鐘の名が見えない。またその反面、杳としてその姿を現さない庭鐘が師、修庵に関わる時にしばしば饒舌にも自身をさらけだしてしまう傾向がある。[1] つまり、庭鐘は修庵を通じて容易に学ぶことの出来る古義堂にはさしたる興味を抱いておらず、純粋に修庵その人・その学問に惹かれていたのである。庭鐘が何ゆえに修庵を師として選んだのかを改めて考えてみる必要があるのではないだろうか。

修庵を考えるためには、さらにその師の後藤艮山という医師をも視点に収めなければならない。というのは、あまり知られてはいないけれども、艮山こそ伊藤仁斎を意識する儒医であり、儒学との関わりや学問の姿勢・幅広さ・京都における文化交流など、すべての意味で修庵の先蹤であったと目されるからである。修庵は恐らく師艮山の背を追いながら、その塾一本堂を指導し、生涯を全うしたと思われる。古今を問わず、師を見る時にはさらにその師の上の師承系列にも視界が及ぶのは人の常であって、庭鐘が修庵を師として選んだ際にも、同時に艮山のありかたが当然視界に入っていたはずである。本稿ではその問題意識の上に立ち、庭鐘が師として選んだ香川修庵と、後藤艮山に照準をあて、おもに彼らの文化交流のさまを浮び上がらせることで都賀庭鐘を考える際の問題点や、秋成も学んだであろう庭鐘の医塾について若干の考察を加えてみたいと思う。「都賀庭鐘の周辺」と副書する所以である。

その文化交流を見るには艮山・修庵の両者が同席した折の資料が

適当であるが、まさに格好の資料がある。享保三年、艮山の六十の賀筵が洛東の円山で開かれた時の記録『祝壽編』（版本。大本一冊。内題、柱刻ともに『壽會詩文』とあるが、含翠堂文庫本の付箋に従い本稿では『祝壽編』とする）である。以下、本書の内容の紹介を通じて、両者の交遊の姿と上方文苑との関わりを見ていくことにする。

まず、本書を繙くと、列席の門人が入塾順に列記されている。

（姓氏）	（名諱）	（表字）	（呼號）	（郷貫）
岡田	近信	陳善	松菴	播州兼田人
小嶋	直寛	克恭	祐菴	山州御牧人
香川	修徳	太冲	秀菴	播州姫路人　今隷京籍
近藤	勝信		良菴	丹州世木人
魚住	尚徳		貞菴	播州姫路人
魚住	尚志		文菴	尚徳弟
加藤	信成	子原	暢菴	浪華人
中嶋	常應		義斎	京兆人
山崎	徳明	善長	泰菴	京兆人
西川	武仲	崇文	丈菴	京兆人
山本	格	思斎	李菴	京兆人
入江	志剛	仲錬	寛菴	浪華人　今籍京兆
鈴木	光重	芳菴		攝州高槻人
松井	正豊	一學	英菴	京兆人
村上	之直	質夫	方菴	浪華人
三雲	徳方	子正	厚菴	阿州撫養人
林	温		回菴	阿州徳嶋人　弟宗竹代
菅	有義		長菴	播州姫路人
林	宗惇	實夫	浩菴	浪華人
谷澤	忠恕	師曾	殷菴	摂州尼崎人　今寓浪華
廣岡	義辰		忠菴	河州枚方人　今籍浪華
小川	尚賢	思順	隆菴	浪華人
和田	充之	元擴	安菴	浪華人
清水	方秀		桃菴	京兆人
廣岡	義保		了菴	義辰兄
渡邉	方義		恕菴	攝州高槻人　今籍河州枚方
中井	知直	伯諒	玄菴	豆州三嶋人
小川	用賢	友信	令菴	尚賢弟
浦上	元東	子西	杉菴	播州姫路人
井上	元忠	恕卿	通菴	播州姫路人
香川	公遠	大佐	禮菴	播州姫路人
清水	修		享菴	方秀弟
森	敬信	知可	槐菴	和州奈良人
中川	充方		瑞菴	江州堅田人
隅田	知道		元菴	讃州松尾人
江田	成章	文蔵	謙斎	浪華人

浪華の詩人、鳥山崧岳との関係が指摘されている[2]浦上元東をはじめとして、一癖も二癖もありそうな人物たちが修庵とともに名を列ねている。また、最後の浪華人・江田成章は「富八きわめ」として浪華に賑いを添えていた江田世恭の縁者であろうか。世恭は上田秋成が『膽大小心録』にその鑑定力を皮肉な筆致で讃え、『諸道聴耳世間猿』のモデルにした人物である。時代が下って幕末の『浪華人傑

談』に庭鐘と交遊があったことが明記されるも、従来その交遊の詳しいことは不明とされてきたが、いかがであろうか、もしこの江田成章が世恭の縁者であれば、庭鐘とのつながりの一つの契機をこの京都の医師の苑に求めることが出来ようかと思う。ともあれ、かかる奇人たちが繰り広げた享保三年の円山の寿筵とはいかなるものであったのか、その本題に移る前にそれ以外の参列者を列記してみる。

○準門人

賀茂　佐平　左京太夫従四位下　山州賀茂人
田中　宗好　京兆人
巖崎　直好　播州竹原人
長崎　克之　即菴　浪華人
山村　幸寛　江州彦根人　今在京兆
緒方　安澂　原仲　悠斎　奥州三春人　今客京兆

○外陪

賀茂　氏基　右衛門大尉従五位上　山州賀茂人

○恩等肉骨義同通家京兆浪華及諸州人氏若干人（姓名のみ）

賀茂季隆・河合正舎・岡田仲貞・瀬尾賢清・服田秀重・茨城方就・和田直好・田中素行・平野雅知・中村睦峰・菅房信・加藤定成・辻富淑・成安榮信・木村綱紀・三木直信

艮山と京・山城の賀茂家のつながりは艮山が賀茂就久の娘を娶ったことに由来する。さきほどの奇人たちに加えて勅撰歌人を輩出した賀茂一統や唐本屋の瀬尾もこの宴に参加していた。さらに「相敬相親故来進賀老儒二公」として次の二人が参加している。

三宅　重固　尚斎　播磨明石人　今寓京兆
三宅　正名　石菴　京兆人　今籍浪華

朱子学の大家にして、時にはその余りにも過激で反体制的な言動ゆえに牢につながれた崎門の鬼才・三宅尚斎、後の懐徳堂初代学主で、やはりその自由な学風ゆえに「鵺」と呼ばれた三宅石庵の二人が、やはりこの賀筵に参列していたのであった。奇人・文人・歌よみ・儒者の名だたる鬼才たちが集い、時は宜し、役者も揃い、いよいよ艮山の六十の賀会が開催される。（適宜、句読点を施した。）

先生

後藤　達　直義　養菴　武都人　今隷京籍　別號　艮山

三月望日甲子、天色開明。群俊咸集坐定。以歯為序。喜酒三行、尚斎三宅子講二仁者壽一章一以助二稱觴一畢。奏二楽六曲一。

五常楽　合歓鹽　慶徳　胡飲酒　酒胡子　陵王

笙　田中素行・香川公遠。篳篥　香川修徳。笛　賀茂佐平・井上元忠。畢。朗二誦詩文一吟二詠和歌一。

序　六篇。補録　一篇。
詩　三十六篇。小序　二篇。古詩　一篇。
和歌　五十四首。長歌　一首。

宴はまず三宅尚斎の講演から始まる。ついで五常楽以下六曲の雅楽が奏された。しかも、その演奏者はすべて艮山の弟子。勿論、修庵も篳篥を奏している。雅楽の後は詩文と和歌の朗詠。単なる絶句や律詩だけではなく古詩までも詠じられている。和歌も長歌をも詠む念の入りようで、とても医師の集まりとは思えず、あたかも殿上人の集いであるかのようである。かかる多士済々の才人が艮山門に集っていたのである。このことは、当然、この門派が結ぶ文化交流の裾野の豊かさに若き庭鐘が触発され、この医塾のありかたが後の近

世小説の巨匠を生みだす母体となったのではないかという期待に満ちた予測を我々に可能にしてくれよう。以下、『祝壽編』の内容からいくつかの興味深い記述を拾い出し、艮山の寿筵に集う上方芸苑の混雑の有りさまを点描し、あわせて都賀庭鐘を考える上での問題点を考察してみたい。

第一に、儒学者とのつながりから述べたい。前述したようにこの宴には三宅尚斎と三宅石庵が参列している。また、艮山は古義堂の伊藤仁斎とも親しかったが、その古義堂盟主伊藤東涯もこの『祝壽編』に詩を寄せている。その他には含翠堂盟主の平野の土橋友直も艮山の門人であって、やはり『祝壽編』に和歌を寄せている。この面々が揃う面白さは、単に艮山の医塾と儒学との幅広い交流がうかがえる点のみではない。石庵・東涯・土橋と並べてみると、実に興味尽きない一事に気付く。即ち、後に大阪に一陣の嵐のように巻き起こった大阪学問所設立の立て役者や擁護者がここに勢揃いしているのである。平野含翠堂が土橋友直を初代盟主として生まれたのが享保二年、ちょうどこの祝宴が開かれた前年である。その含翠堂に東涯が講義に赴いていたことはよく知られていることである。石庵が初代学主となって懐徳堂が開校されたのが享保九年、この宴の六年後にあたる。石庵も含翠堂に出講している。つまり、含翠堂や懐徳堂といった大阪学問所の仕掛け人たちの交遊が、艮山を取り囲む学苑とそのまま重なっているのである。この学苑は大阪学問所勃興の前史と称してもよく、彼らが艮山の塾に集い、そこで繰り広げた学問と教育への情熱溢れる歓談のうちから大阪の町人のために町人が設立する学問所の構想が育まれたとするのは余りにも甘美な想像に過ぎようか。塾ということでは先達に東涯がいて、様々なアドバイスを聞くことが出来た。そしてなによりも、艮山の自由で幅広い文化交流に富むこの塾こそ彼らの最良の見本であったのである。この『祝壽編』は当然含翠堂にも所蔵されており、含翠堂に東涯が出講するといった形の先蹤は、既にこの三宅尚斎を招き講義を聞くという艮山の塾のありかたに求められるのである。このことは、単に含翠堂や懐徳堂にのみ適用されることではない。後述する庭鐘の医塾のありかたや、また庭鐘の学問が古義堂や懐徳堂と直接の関係が薄く、香川修庵の医塾・一本堂によりかかっているといった問題に対するひとつの示唆を、この艮山の塾のありかたが与えてくれることをまず指摘しておく。

ついで、歌人とのつながりについて述べる。先述したように艮山が山城の賀茂家の娘を娶った関係から、勅撰歌人を輩出した賀茂家とのつながりが深い。『祝壽編』には計十一首の賀茂一族の和歌が列ねられている。この期の賀茂家の和歌が堂上か地下かを区別する意味がどこまであるのかは判らないけれども、艮山の周辺には賀茂家の歌人がいたことは注意されてよい。この賀茂家から後に、奇才・賀茂季鷹が上方文苑に登場し、秋成や小沢蘆庵らと交わっていくからである。その賀茂家との交流が一時代早く艮山、即ち都賀庭鐘を生みだす医師の文化圏に見られるのである。庭鐘と賀茂家、特に季鷹との関係は今後の研究課題となるのではないだろうか。

歌人とのつながりという意味では梅月堂香川宣阿との交流についても見過ごすことはできない。『祝壽編』にはやや唐突に宣阿の和歌が採録されている。詞書は「後藤君の六十を祝し奉りて」とあって、やはり艮山とそれ以前からの交流があったことが知られる。言うまでもなく、宣阿は後に景樹を生みだす香川家の興祖であって、

二条派歌人の俊英である。前身が儒者であった宣阿は古義堂ともつながっており、その関係で艮山とも面識があったのだろうか。あるいは宣阿が一時身を寄せていた時宗・大炊道場の存故は俳諧初の撰集『犬子集』を出版したことで知られるが、医師とも知己であって、曲直瀬玄朔の『薬性能毒』をも開版しており、その関係で両者は交遊を持つに至ったのだろうか。いずれにしても、艮山はこの堂上歌人とも交流関係があったのである。そして、この宣阿と艮山の交流は、後の香川景樹と庭鐘の交遊や、景樹をめぐる論争と庭鐘一派とのかかわりの有無をも含めた新たな検討材料を提示してくれていよう。

更に、歌人とのかかわりを論ずるに際して、貞門派とのつながりについても触れておかなければならない。なぜならば、夙に小高敏郎氏が紹介されていることではあるが、[3] 艮山の高弟・修庵の篋底に貞門派歌人和田以悦の歌伝書『伝授抄』が伝わり「此人以悦ヨリ直伝歟」と記されている以上、修庵と貞門派との関わりは認めざるを得ず、その貞門派との関わりが修庵から始まったのか、或は既に艮山の代からあったのかどうかを検討しなければならないからである。『三家医話』（天保九年写。京都大学富士川文庫蔵）に次の興味深い記事を見いだす。

先生在日大坂鯛屋貞柳来リ、狂歌ヲ詠。先生即坐ニ返歌アリ

由縁斎

薬ハ毒々ハ薬トノミコンダ才智ハ古今マレナ薬司（クスシ）ゾ

先生

薬ハ毒々ハ薬ト人ガイフ由縁ハイカゞミテカキイテカ

喰ラフテモクラヒモ得ズニノムナラハアメガシタニモナメテ

シルカモ

貞柳の号「由縁斎」を踏まえた才智ある切り返しである。貞柳と艮山の交流も既に指摘されており、和歌と狂歌の違いはあるが、艮山と貞門のなんらかの交渉は認めてもよいと思われる。しかしながら、土橋友直が師とした貞門派歌人河瀬菅雄の名が『祝壽編』には見えない。菅雄は本来医師であって、しかも京住、艮山と交流があっても不思議ではない。艮山と貞門派との関わりは存外薄いのかもしれない。しかし、その弟子修庵が貞門と深く関わっていく背景、艮山と貞柳の交流を考え合わせてみた時、艮山と貞門派とのなんらかの交渉を認める方が自然ではなかろうか。

以上、艮山と歌人との交流について、賀茂家・二条派香川宣阿・貞門との関係を述べた。庭鐘を生みだした京医師の塾の周辺には諸派の歌人がいたのである。庭鐘がこれらの歌人をどう見ていたのか、彼らとの交渉があったのか、また処女作たる『英草紙』の冒頭話の発端契機が「歌枕」であることは偶然なのか、今後こういった庭鐘の歌学の素養を問題にする場合には、これらの賀茂家、二条派、貞門派との交流とそこから得たであろう断片的知識の総合を捉えることが先決であることを第二点として指摘しておく。

その他、『祝壽編』には次の興味深い記事がある。

府下の士、姓某、梅川と號する者あり。畵を狩野の養朴翁に学ぶ。因って南極老人の圖を作らしめて以て献ず。（原漢文）

本来、上杉本『洛中洛外図』に活写される竹田法印家に見られるように、狩野永徳の昔から狩野派と京都医師とのつながりは深いが、艮山も狩野派の絵師とも交流があった。そして、このことは秋成・庭鐘周辺の上方文人の絵画に対する関心を推るうえでも看過できな

い問題でもある。秋成の『膽大小心録』に次の記述がある。

繪は應擧が世に出て、寫生といふ事のはやり出て、京中の繪が皆一手になつた事じや。これは狩野家の衆がみな下手故の事じや。妙法いんの宮様が應擧が弟子で、この御すい擧で、禁中の御用もたんとつとめて、死んだ跡に、月渓が又應擧の真似して、これも宮さまの吹擧で、應擧よりはおかみに氣に入つて、追々御用をつとめる中に、腎虚して今に繪はかけぬにきわまつた。其弟子どもがたんとあれど、どれとつても十九文。

秋成は應擧・月渓の興隆の原因を狩野派の凋落に見る。つまり、やや粗っぽく言うならば、狩野派の延長に上方文人画を置くという絵画史観を抱いているのである。この史観が全く彼独自のものであったとしても、秋成がこのように記す背景には、やはり狩野派と秋成・應擧・月渓らとの底流でつながる精神的な一本の糸を認めざるを得ないのではないだろうか。ひるがえって庭鐘と絵師との関係を鑑みるに、そのつながりは深い。特に挿絵を好んで描かせた桂宗信を終生愛し、自らの遺稿までも彼に挿絵を描かせるように指示している。その宗信の墓表に「画工桂宗信」と大書したのはほかならぬ庭鐘であった。秋成と庭鐘との邂逅の仲介の労を執ったのが宗信であったらしいことも既に述べられている。(4)「画工」という風狂なる墓表に、庭鐘と宗信の戯れながらも同じ熱い青年の時を過ごしてきた厚誼の様子が見られることと思う。この上方文人と絵師との交流が既に艮山の時には存在していたこと、これを第三点として指摘しておきたい。

最後に、庭鐘の医塾・辛夷館（庭鐘の本草書『南産志』の柱刻）はいかなるものであったのか、それが艮山の塾の在り方や精神を継承しているのかどうか検討しておきたい。その検討によって、初めて『祝壽編』、もしくは本稿で取り上げた艮山の医塾が庭鐘の周辺としての意義を持ってくるからである。

庭鐘の医塾を考えるならば、やはり彼の塾に学んだ秋成にその情報を求めるのが妥当である。

伊勢人村田道哲、醫生にて大坂に寓居す。一とせ天行病にあたりて、苦脳尤甚し。我が社友の醫家あつまりて、治する事なし。道哲が本郷より、兄と云人来たりて、我徒にむかひ、恩を謝して後、「今は退かせたまへ」と云ひしかば、皆かへりし也。兄、道哲に云。「汝京坂に久しく在りて、醫事は学びたらめど、眞術をえ学ばず。諸醫助かるべからずと申されし也。命を兄にあたふべし」とて、牀の上ながら赤はだかに剝ぎて、扇をもてしづかにあをぎ、又時々薄粥と熊膽とを口にそゝぎ入て、一二日在るほどに、熱少しさめ物くふ。ついに全快したりしかば、國につれてかへりし也。

（『膽大小心録』）

この記事の波線部により、庭鐘の塾は社と呼べるものであったこと、最新の医学知識は大層なものを持っているが実際の治療にそれほど長けてはいなかったことを知ることが出来る。そして、何よりも注目されるのは、自分たちが今学んでいる最新の医学では治らなかった同学を古風な施術でいとも簡単に全快させ、しかも自分たちに失望し、弟を連れ帰った伊勢人に対して、秋成がもろ手を上げて賛嘆していることである。偏屈なまでの矜持を抱く秋成が、かくまで軽侮されながらも癇癪を起こさなかったのはなぜだろうか。二重傍線部に注目されたい。日本古典文学大系の頭注「後藤艮山は、この薬材を専ら用い、熊胆丸を発明した」を参照するまでもなく、熊胆は

艮山の代名詞といってもよい治療法である。すなわち、この伊勢人は艮山流の医術を身をつけていたのである。艮山―修庵―庭鐘という系統のなかで学んできた秋成の社友にしてみれば、今の最先端の医術では治せなかった同輩の病を、一昔前の艮山の治療法で治するを目の当たりに見せつけられ、改めて系祖の偉大さに息を飲んだことと思う。秋成はこの引用文の後に「是はまことに醫聖也」と、その艮山流を伝承する伊勢医人を讃えている。『書初機嫌海』（天明七年）にも「さて学問の風（筆者注、医学）も、二三十年前とはちがうて、一家の見識を立つる人なく」と、当代の医学を批判し、艮山・修庵時代の医家を思慕している。また、既に述べたことではあるが、秋成が宣長との論争の末、憤りおさまらず著した神宮文庫蔵『安々言』には付箋があって、そこには香川修庵の学問態度に盲従する庭鐘と秋成の姿を見ることが出来る。秋成にとって、否、むしろ庭鐘の医塾生にとってと言ってもよいであろうが、理想とする医塾とはやはり艮山・修庵の塾であったのである。この『膽大小心録』の記事によって庭鐘の医塾が持つ雰囲気の一端や、彼の塾で依然、艮山・修庵の影響が強かったことを知ることができよう。

とりわけ、その中でも依然として艮山の医塾の影響が強かったことを、上田秋成の著『膽大小心録』の題名の由来を問題にすることで少しく考察してみたい。従来、この書名は中国の名医・孫思邈の故事（医師は人を救おうとする胆が大きくて、また同時に人の命の重さを知る細心さが必要）に由来するとされてきた。それは典故という意味では正しいが、問題は「膽大小心」という言葉の享受のされ様と、秋成がこの言葉を書名に用いるに至る経緯と意識の解明にある。なぜ、忿懣と韜晦惷く狂蕩の書が『膽大小心録』と名付けられなければならなかったのだろうか。秋成はこの題名にいかなる思いを投げかけていたのか、まずこの語が孕む一般的な意味合いを見てみる。この語は早くから、『朱子語類』や『文章軌範』に採録され、例えば貝原益軒の『増補和漢名数』（元禄五年）にも、「志欲レ大（ナランコトヲ）＜割註＞欲レ救レ人（スクハント）」心欲レ小（ハスコトヲ）＜割註＞以二人命一為レ重（シテ）不三敢（ヘ）妄投二一剤一（ニ）」とあるように、往来物にも採録されるほど、孫思邈の故事を離れ、医師の取るべき態度を示す語としてかなり広く普及していた言葉であった。ところが、この語を積極的に座右の銘とした医師がいる。後藤艮山その人である。

余、つねに心小胆大の語を称え、もつて医家の喫緊となす。

（浅田惟常編『先哲医話』・後藤艮山の項）

先述の秋成の艮山への敬慕を考え合わせてみれば、この語が艮山の口癖であったことの意味は大きい。人の命の重さを知る「小心」と、人を愛し救済せんとする「膽大」、一見相反する響きを持つ語を組み合わせたこの絶妙なる言葉は、まさに揺曳するおのが心を抱いたままに人を愛し続けた秋成、常に本物を志向しながらも中途半端な「のらもの」でしかないと過剰に意識していた彼を捉えるに格好の一語であったと思われる。この語を用いることで、秋成は艮山の精神を追慕し、もはや伝説となっていた医聖の矜持と細心に満ちた態度におのれを託していたのではないだろうか。もちろん、先の『安々言』の付箋の場合と同様に、この語と艮山の精神を秋成にもたらした人物は、やはり都賀庭鐘だと考えるのが至当であろう。このことはとりもなおさず庭鐘の医塾における艮山塾の影響を端的に示していよう。

以上、本稿では庭鐘に強く影響を及ぼしていた師・香川修庵の在

り方の素地となった後藤艮山の文化交流のさまを、艮山六十の寿筵に編まれた『祝壽編』を中心に伺ってみた。そこに繰り広げられる世界は、崎門・懐徳堂・含翠堂・古義堂という当時の上方を代表する漢文学、賀茂家・二条派の香川宣阿・貞門派という堂上と地下にわたる歌学、そこに狩野派の絵画と貞柳狂歌という彩りを含み込んだまさに上方文苑のエッセンスを集約した理想の文化圏であった。この艮山塾のありかたは『恨之介』や『竹斎』を生みだした近世初期の文芸作成の場であった医家の趣を持っている。その中から都賀庭鐘という諸芸を嗜む医師が生まれてくる意味を改めて問わなければならない。仮名草子時代の作者のありかたと庭鐘のそれとを引き比べてみることによって、或は逆にそれらとは隔絶し超越したところに庭鐘の個性をみるのかどうかといった視点によって、新たな庭鐘像を結ぶことが出来るのではないだろうか。例えば、『通俗医王耆婆伝』（宝暦十三年）は仏典『奈女耆婆経』を典拠としているが、この仏典を典拠にしている作品に、いわゆる御伽草子の『不老不死』がある。『不老不死』はお伽の場における医師の語りを取り入れていることは既に指摘したが、[5] 庭鐘が『不老不死』の存在を全く知らないでただ個人的な関心から『耆婆経』に興味を持ったのか、それとも『耆婆経』を享受していく医師の伝承を襲ってこの作品を著したのかが今後の問題となると思うのである。

艮山の精神の影響は大阪学問所にのみではなく、庭鐘塾、そして庭鐘を介して秋成にまで及んでおり、若き庭鐘にとってこの京の医師たちのありかたがいかに魅力的であったのかを知ることができる。庭鐘が師として香川修庵を選び、大阪に戻っても度々一本堂に出入りしては白話を学んでいた理由は実はこのあたりに由来するのではないだろうか。このことは庭鐘を考える際に、今後是非とも念頭においておく必要があると思われる。特に庭鐘が結果的には、彼への影響力が強かった香川修庵や後藤艮山らが嗜んでいた歌学へは関心を抱かず、彼邦の漢詩文や投壺などの方により関心を抱いていったことは、庭鐘の個性を考える際に重要である。同様に、古義堂・懐徳堂関係者が周囲に居ながら、そのどの学派の影響も受けていないことの意味、同門でしかも慶長以来の薬種屋・土橋友直とは交渉の無かったはずはなく、それでいて含翠堂との連歌俳諧を含めた没交渉の意味を考える時に、初めて庭鐘の非常の人たる強烈な個性が浮かび上がってこよう。そういった庭鐘の個性を浮かび上がらせてくれる資料として『祝壽編』を取り上げることの意義は少なくないと思う。

もちろん、資料の性格として雅文芸が中心となってしまったが、「都賀庭鐘の周辺」と題するからには今後別方面の資料により、演劇・俳諧（特にこの期に勃興してきた淡々らとの交渉の有無など）・『本草妓要』などの上方洒落本・田宮仲宣などの上方戯作・銅脈らの狂詩といった俗文芸との関わりをも俯瞰すべきであること、いまさら述べるまでもない。今後の資料の出現に期したいと思う。それらの資料と併せ用いることによって、『祝壽編』の持つ意義が再評価されるべきであろう。

奇しくも、この庭鐘を捉える際の示唆に富む『祝壽編』が編まれた年、雅趣芳馥たる京の一夜の寿筵が催された享保三年は、後の斯界文苑を震撼させ、読本という新ジャンルを日本小説史に生みだし、近代文学への萌芽を果たした江戸時代屈指の巨人・都賀庭鐘が産声をあげた年でもあった。

注

(1) 拙稿「都賀庭鐘―読本作者の祖」(『国文学解釈と鑑賞』平成六年八月号)

(2) 多治比郁夫氏「宝暦の大阪詩壇」(大谷篤蔵氏編『近世大阪藝文叢談』所収)

(3) 『近世初期文壇の研究』

(4) 中村幸彦氏「都賀庭鐘雑攷」「上田秋成伝浅説」

(5) 拙稿『『竹斎』の周辺』(『語文』第五十九輯)

――甲子園短期大学専任講師――